

福祉国家の中のボランティア

——デンマーク・フレデリクスベア市の取り組み

坂 口 緑

1. はじめに

本研究は、20世紀を通していち早く高水準の福祉国家政策を実現してきた国として知られるデンマークにおいて、ボランタリーセクターがどのような役割を果たしているのかを明らかにすることを目的とする。デンマーク国民（人口550万人）は、3人にひとりが何らかのボランティア活動に取り組み、ボランティア組織も大小合わせて10万団体あるといわれるなど、19世紀以来のアソシエーションナリズムの伝統をもち、現在もアソシエーション活動が盛んな社会である（Levinsen&Thøgersen&Ibsen 2011）。また近年、社会的経済、サードセクターあるいは「社会的企業」に注目するEUの政策方針と軌を一にするように、デンマーク政府も非営利団体に対する政府の助成や、ボランタリーセクターを対象とする全国調査も行ってきた（Boje&Friedberg&Ibsen 2006；Boje&Freidberg&Ibsen 2008）。その結果わかったのは、デンマークで「盛んな」アソシエーション活動は、大半が会員に対するサービスの提供であり、その大部分がスポーツを中心とする余暇活動分野だという点だった。子ども時代を通して、何らかのアソシエーションに属し、サッカーやハンドボールを経験することは、デンマークにおける市民生活のごく普通の経験となっている。それは、学校の次に「デモクラシーを学ぶ場」と認識されており、そのため、移民背景を持つ人々

のアソシエーションへの参加が、政府にとって「統合」を果たす手立てとなるのではないかと期待されている。

このような一般的なボランタリーセクターの役割についての理解は進んだものの、依然として、他の社会と比較すると発達した福祉国家制度をもつ社会において、なお、福祉領域におけるアソシエーションがどのような役割を果たしているのかは明らかではない。日本では、しばしば、NPOが「安い労働力」として活用される「下請け化問題」が指摘され、とりわけ福祉領域ではその傾向が高い。その中で、2009年の調査の際にお話をうかがった、ボランティアソーシャルワークセンターのイエーアさんは興味深い点を指摘する。それは、ボランティア活動は「国家のリソースではなく生活の質そのものだ」という発言である。イエーアさんは、国家が「リソース」としてアソシエーションに期待を寄せている傾向があることを認めつつも、ボランティア活動は、その人がそうあってほしいと願う社会を実現するための手段であって、国家が生産や雇用のリソースとして活用できるものではないからだといい、そのためにデンマークの「社会サービス法18条」は整備されている、と指摘する（坂口 2011：54）。

「生活の質」という理解は、どのくらいボランティア活動を実践している人たちに共有されている考えなのか。そのような点を強調するこ

とで、「やりがいの搾取」に陥ってしまう「下請け化構造」が日本では常に問題視されるのに対し⁽¹⁾、デンマークではそのような問題はないのか。また「18条」についてはどの程度、知られているものなのか。今回、デンマークを訪問したのは、これら点について現場での理解を調査するためである。「ソーシャル」な領域、すなわち福祉国家と市民社会の間で、個別の団体はどのような条件のもと、活動を継続しているのかに焦点を当てたい。

2. 調査の枠組み

本稿は、筆者が調査協力者とともに2010年8月から9月に実施した、デンマークのフレデリクスベア市やその近郊を拠点に活動する4つ団体の代表者と市役所の担当職員、合わせて5名に対するインタビュー調査のまとめである⁽²⁾。調査の概要は次のとおりである。

- (1) 調査対象 居場所活動 (Aktivit Samvær) 主宰
アレキサンドラ・ドシー (Alexandra Dossey) さん
- 調査方法 インタビュー調査
- 調査日時 2010年 8月23日 (月)
10:00-11:00
- 調査項目 設立のきっかけ これまでの経緯 運営体制 「下請け化」問題等
- (2) 調査対象 母親を助ける会 (Mødrehælpen) フレデリクスベア支部長
イエッテ・ハリング (Jette Halling) さん
- 調査日時 2010年 8月24日 (水)
11:00-12:00
- 調査項目 設立のきっかけ これまでの経緯 運営体制 「下請け化」問

- 題等
- (3) 調査対象 梟の会 (Natte Ravnene) フレデリクスベア支部長
ピーター・ウィレンズ (Peter Willens) さん
- 調査方法 インタビュー調査
- 調査日時 2010年 8月24日 (火)
19:00-20:00
- 調査項目 設立のきっかけ これまでの経緯 運営体制 「下請け化」問題等
- (4) 調査対象 K10主宰
Dさん Hさん
- 調査日時 2010年 8月25日 (水)
14:00-15:30
- 調査項目 設立のきっかけ これまでの経緯 運営体制 「下請け化」問題等
- (5) 調査対象 フレデリクスベア市ボランティア
アコンサルタント
イエッテ・ホフ (Jette Hoff) さん
- 調査日時 2010年 9月 1日 (水)
11:00-12:00
- 調査項目 ボランティア賞について これまでの経緯 「下請け化」問題等

(1) から (4) の4つの団体は次のような理由で選択した。デンマークでは2007年頃から、各自治体が主催する「ボランティア賞」と呼ばれる表彰制度が実施されている。実施は任意で、内容も審査基準も自治体ごとに異なっているが、もともとはEUが主導する2011年ヨーロッパボランティア年に向けて計画された賞である。コペンハーゲン市に隣接する、面積が狭く比較的富裕な層が居住する地区として知られるフレデリクスベア市では、「ボランティア賞」

の実施のみならず、「ボランティアフォーラム」を組織するなど、アソシエーションの設立や活動を支援する体制を整えてきた。今回は、このフレデリクスベア市で活動している三つの団体にインタビューをすることができた。そのうち一つは、ボランティア賞を受賞した団体であり、また二つは「ボランティアフォーラム」に参加している団体である。またもうひとつの団体は、活動の性質上、活動拠点を明らかにせず、ウェブ上でのみ活動を展開している任意団体で、正確には「アソシエーション」ではない。この団体に注目したきっかけはデンマークの全国紙『インフォマシオン』で紹介されていたからである。あえてアソシエーションとならない団体にその理由を尋ねるためインタビューを申し込んだところ、特別に許可してくれた。加えて、「ボランティアフォーラム」の運営を担当するフレデリクスベア市役所の担当者にも話をうかがった。

5名のインタビュー対象者に対しては、事前に作成した共通のフォーマットを送付し、それについてそれぞれ60分程度の時間を割いて回答してもらった。インタビューはデンマーク語で行った「K10」をのぞき、英語で行われた。

3. インタビュー・データ

(1) 「居場所活動」アレキサンドラ・ドシーさん

「居場所活動」と訳すことのできる団体を主宰しているアレキサンドラ・ドシーさんは、26歳、コペンハーゲン大学で社会経済学を専攻する学生で、つい3週間前に女の子を出産したばかり。「赤ちゃんを置いて外に出かけるのは、今日が初めて」と言いながら、待ち合わせ場所のカフェに颯爽と現れた。

ドシーさんが主宰するのは、会員30名、スタッフ8名ほどの小さな団体で、高齢者と若い世代が交流するための会である。会員から会費

を集めて会員のために運営する典型的なアソシエーションである。設立は2008年という新しい団体であるものの、若い世代が高齢者と交流するという活動がユニークである点、とりわけ、「支援」ではなく「楽しみ」として活動を行っている点、地元根付いた活動である点などが評価され、2009年フレデリクスベア市の「ボランティア賞」を受賞した。主催者のドシーさんは、「ボランティアフォーラム」の理事のひとりにも選出された。

設立を思いついたのは2007年でした。1年間、準備をしました。講座に通い、経理の方法を学んで、2008年に団体を設立しました。設立当初は、学校の教室を借りて活動する程度のものでした。ボランティアは全部で8名でした。21歳から28歳で、私のような学生のほか、看護師をしている友人や企業で働いている友人も参加してくれました。

ドシーさんは、都市のなかで、高齢者が若い世代と普通に出会う場がないことが気になっていた。デンマークでは高齢者はとりわけ、単身になったのち、孤立する。たしかに単身での生活が困難な高齢者に対しては、介護サービスや通院の手伝い、買い物の付き添いなどの制度は整っており、声をあげれば支援を得られる。しかし、ある程度健康で、自力で生活を営める高齢者はそのままに放置され、独力で人間関係を維持し、形成することを強いられる。家族や友人が次々と減少する経験をしながら、孤立が深まる都市居住の高齢者に対し、若い世代が何かできるのではないかと思ったという。ドシーさんは次のように言う。

私たちは「淋しい老人を助けよう」とは思っていないんです。そうではなくて、高齢者と一緒に何かを楽しみたいと思っていました。この団体を立

ち上げようとするとき、地元の新聞に記事を書いてもらいました。そのときも、「高齢者を支援する」とは書きませんでした。そうではなく、意味を少し「ツイスト」して「私たち若者が高齢者と一緒にいる機会をつくりたい。お年寄りの人たち、私たちを手助けしてくれませんか」と書きました。私たちが一緒にいたいのだ、ということを伝えようと思ったんです。

この方法がうまくいき、ローカル新聞とスーパーマーケットの入り口にある掲示板という二つの方法による広報のみで、予想した数の高齢者が「オープンデー」に集まった。オープンデーから半年で会員数30名に達し、現在は5名の入会希望者が待機している。現在、男性が3名、27名が女性。最高齢者は94歳。60歳代の女性は「月曜クラブ」の他にも、マンション (Andeles Bolig) の理事長を務めるなど、地域活動に熱心な会員もいるが、それはどちらかという例外的だという。

活動内容は、週に1回開催する「月曜クラブ (Mandagklub)」に集まること。ボランティアスタッフが、コーヒーと自家製ケーキの用意をする。「最初は、ボランティア2名ずつ、月に1回くらいの担当にしよう」と話していたのですが、結局、みんな、自分の担当日以外の日が気になって、それで毎回、全員が集まることになりました」と笑いながらドシーさんは話す。ボランティアスタッフは、「月曜クラブ」の他に、月に一回、会合を開いている。集会をするのは、フレデリクスベア市の「文化の家 (Kulturhus)」、通称「黄色い家 (Det Gule Villa)」である。高齢者の会費は年100クローネ (約1,500円)。年間の予算は2,000-3,000クローネ (約30万円~45万円) と少額であるが、会場費は無料であるため、支出はコーヒーとケーキの材料費のみ。財政的にとくに困っていることはないという。活動のポリシーは、第一に、誰

でも参加できること。新しい人に出会いたいという思いを持っている高齢者であれば、誰でも歓迎する。第二に、歩くのは500メートル以内、ということ。「月曜クラブ」に代わって、日本料理を食べに行く会、映画を見に行く会などの「遠足」も行っているが、その際にも、ボランティアスタッフが事前にコースを検討し、歩く距離が長くないよう配慮しているという。第三に、ローカルであること。日常生活を送るなかで、挨拶をしあう関係、家に呼んだり呼ばれたりしてコーヒーと一緒に飲むことができる関係作りを目指しているので、ボランティアスタッフも、会員の高齢者も、できるだけフレデリクスベア市や近郊のコペンハーゲン市に在住していることが望ましいというゆるやかなルールがある。ドシーさんはいう。



市のコミュニティセンター「黄色い家」

「下請け化」については、私たちの団体に関してはまったく関係のないことのように思えます。私たちは自分たちがしたいようにしているし、そうでなかったら活動をやめてしまうでしょう。市はたいへんサポーターでほんとうに感謝しています。ボランティア団体に対する政府の役割は、枠組みを与えること、なのではないでしょうか。たとえば、私たちの活動も、あの「黄色い家」がなければ成り立たなかったでしょう。体育館があることでバスケットボールチームが活動できるように、私たちの団体も、「文化の家」があることで活動を続けられます。実は、以前は学

校の教室を借りて活動していましたが、学校行事の都合で安定して毎週同じ時間に借りることが難しいとわかり、地元の市会議員を通して、「黄色い家」を使用できるようにかけあってもらったんです。そのような機会を与えられて、ほんとうに助かっています。

高級住宅地で知られるコペンハーゲン市北部の街で生まれ育ったドシーさんは、もともと、「黄色い家」のような大きな家で、大学関係者の両親のもと、3人の兄弟と祖父母の8人で暮らしていた。現在も頻繁に訪問しあう近い関係を保っている。一年間のロンドン留学を経て、帰国。この活動を立ち上げた。ドシーさんの語りには、「与えられた」「ラッキーだった」「感謝している」といったポジティブな言葉が何度も出てくる。ほんとうにそのように感じて、活動自体を楽しんでいるように見える。

とにかく毎週、月曜日がほんとうに楽しみなんです。週でいちばん楽しい日です。理由は、友達に会えるから、でしょうか。高齢者のためのボランティア活動をしているという、理由をとにかく尋ねられるんです。子ども向けのボランティア活動ではそのようなことはないのに、高齢者というだけで、もしかして新興宗教なのかどうかと疑われることもあります。確かに年は離れているのですが、気の合う友達に会い、おしゃべりをして、どこかに出かけることができるのは、とても楽しいことです。私たちは、今までのプロセスで、まったく間違いがありませんでした。ローカル新聞の記事も、オープンデーの開催も、その後、集まってくれたすばらしい会員たちも、「遠足」の計画も。ほんとうにラッキーだと思いますし、手助けしてくれるみんなに感謝しています。

デンマークにおけるアソシエーション活動は、従来、男性が活動する場だとみなされてきた。男性が友情をはぐくむ場としてのスポーツクラブというイメージが先にあり、現在も、ボ

ランティア活動をする典型的な像は、30歳から45歳で、子どもをもっているフルタイムの仕事をもつ男性、とされている(Boje&Friedberg &Ibsen 2006:9-14)。しかし、近年、新しいタイプのアソシエーション活動が注目されており、その担い手は、社会福祉分野に関心をもつ若い女性である、と言われるようになった⁽³⁾。ドシーさんとこの団体に関わるボランティアスタッフは、そのような新しい傾向を代表する一群である。

(2)「母親を助ける会」 イェッテ・ハリングさん

「母親を助ける会」フレデリクスベア支部の理事長を務めるイェッテ・ハリングさんは、70歳代の年金生活者で、以前は英語を教える教師だった。6年前にフレデリクスベア支部を立ち上げた5人の理事のひとりで、当時から代表を務めている。ハリングさんもフレデリクスベア市の「ボランティアフォーラム」の理事である。「母親を助ける会」は、地元の人たちの圧倒的な支持を得る子ども服の古着店を運営している。地下鉄フォーラム駅から徒歩3分の場所にあるこのショップは、開店前から人が集まる人気の店である。

「母親を助ける会」は、デンマーク発祥のアソシエーションで、もともと母親を支援するためのよく知られた団体である。活動内容は、支部や団体によって活動内容は異なっているものの、シングルマザー支援、その子どもたちの支援、若い母親の就学・就職支援などを行っている。ハリングさんが理事長を務めるフレデリクスベア支部では、次の3つの活動を行っている。第一に古着店の経営。地元民から持ち込まれる服を仕分けして販売するショップは、この団体にとって、大きな収入源となっている。第二に支援を必要とする母親たちの窓口となること。ボランティアは有資格者ではないためその

場で助言を与えることはできない。そのため、市の担当者やソーシャルワーカーと連携をとることを目的としている。第三に支援を必要とする母親たちの日常的な支えとなること。とりわけ、クリスマスや夏休みのアクティビティをアレンジする仕事を担っている。どのように、支援が必要な母親とコンタクトをとるのかという問いに対して、ハリングさんは次のように説明する。

ショップがあることで、私たちの団体が母親を支援する団体だということがわかってもらえます。アウトリーチについては、母体団体がパンフレットを作成してくれるので、それを病院、家庭医、保育園、児童施設などにおいてもらっています。基本的にはただ待っているのが私たちの仕事で、電話をかけてきてくれたお母さんたちには、どんな市の支援があるのかを説明はしますが、手続きを手伝うことはありません。その前に、市のソーシャルワーカーに知らせることになっています。



ショップ外観

「母親を助ける会」には、洗練された色調のパンフレットが取りそろえられており、ホームページも見やすくデザインされている。小物や缶バッジ、ショップ店内も垢抜けている。印刷

物やウェブサイトのデザインはデンマーク王立建築デザインアカデミーの学生が担当しており、またショップのレイアウトも、地元の商業学校の学生たちがインターンとして手伝っている。子ども服や雑貨専門の古着店には、毎月段ボール箱数十箱の子ども服が持ち込まれるが、それをボランティアスタッフが仕分けをしている。ボランティアは全部で14名。内5名で理事会を組織している。ハリングさんは、店に出たり、現在、自分が担当している4家族を順番に訪問したりしているという。ショップに持ち込まれる古着のうち、店頭に並んで3ヶ月経っても買い手のつかない商品はルーマニアの児童施設に送付している。ショップは、現在、ボランティア不足のため、週の5日の営業日のうち半分ほどしか開店できないというが、それでもかなりの資金を調達できている。「母親を助ける会」に所属するショップは売上げの30%を本部に納める仕組みになっているが、それとは別に昨年度、300,000クローネ（約450万円）を本部に寄付をしたほどだという。

会が支援する母親はどのような人たちなのか。ハリングさんは次のように話してくれた。

私たちのグループが支援する母親たちのほとんどがシングルマザーです。そして、移民背景をもつデンマーク人や外国人も多いです。すべての人の背景を把握しているわけではありませんが、たいてい悲惨なストーリーを抱えています。デンマーク人男性とフランス人女性の夫婦は、7年間の結婚生活で自分たちの子に恵まれず、ルーマニアから養子を迎えました。けれどもその後、男性はその子を自分の子とは思えないと言い、フランス人女性と離婚をします。彼女は、家族の支えも得られないこの土地に、養子と二人、残されます。一時期、ある国の大使館で働いていたこともある聡明な女性なのですが、その部署も閉鎖され、現在は失業しています。離婚、失業、暴力、

「貧困。そのような困難の中にある母親とその子どもたちを支援するのが、私たちの仕事なのです。」

ハリングさんは、自分たちの子ども時代と比べて、現代社会に育つ子どもたちが置かれている困難な状況を心配する。両親ともに長時間働くようになり、周囲のサポートがなければネグレクト状態におかれがちな子どもたち、物質的な条件が整っているため、ほんの少しの欠乏が「貧困」に見えてしまう状況。とりわけ、日々の暮らしに追われる家族にとって、デンマーク社会で重視されるお誕生日会、クリスマスパーティ、夏の旅行といった子どものためのイベントが、とても「贅沢」なものに映るのだとハリングさんは言う。そのため、フレデリクスベア支部では、これらの「贅沢」を支援する仕組み作りに取り組んでいる。

たとえば、大手スーパーマーケットのフューテックス (Føtex) と契約を結び、会の備品や文房具を購入することと引き替えに、誕生日を迎える子どもをもつ母親に対して、合計150クローネ (約2,250円) のギフト券を毎月、無料で提供してもらうよう手配した。母親は子のプレゼントやケーキを手に入れることができる。さらに、クリスマスにも500クローネ (約7,500円) のギフト券を配布する。クリスマスのギフト券は会が買い取るが、誕生日のギフト券はフューテックスが社会貢献活動の一部として提供している。また、2010年の夏には、ノルウェーへの2泊3日の船旅を実現させた。これも、DFDS フェリー社の社会貢献活動として、ほとんど持ち出しなく実現できたのだという。ハリングさんは次のように説明する。

「夏休みにオスロへの2泊3日の旅行をしてみました。大人が23名、子どもが44名でした。プールやカジノや映画館もある豪華な大型客船、バイキ

ング料理、そして宿泊を含むすべての料金が、無料だったんです。私たちはただ、港までの交通費と、オスロでの2台の観光バスを手配しただけでした。もともとは、別の用事でフェリー会社に訪問したときに、思い立って、会のために特別割引をしてもらえないかどうか尋ねたのがきっかけでした。私たちはショップから収益を得ているので、自分たちのお金でできる国内でのキャンプにしようかと思っていたところだったのです。けれども、何でも言ってみるものですね。割引をお願いしたら、全部が無料になるなんて。おかげでもとてもいい旅でした。」

経済的に豊かなデンマークの国で「人並み」の生活を送るには、このような「贅沢」な支出が必要になる。会はこれを贅沢だからと退けるのではなく、できるだけ実現できるように手配をしているのだという。

ハリングさんが代表を務めるこの支部が、政府や市との関係をどのようにみなしているのかを尋ねると、市の「フォーラム」の利点として、他の団体との活動ができることだと話してくれた。あるクラシックカー愛好者の会の人たちと知り合い、毎年、夏の始めに開催されるクラシックカーのレースの特別席に、入院中の子どもたちをつれて観覧することができたという。また、デンマーク・サンタクローズ協会と知り合ったおかげで、今年のクリスマスパーティは「本物」のサンタクローズも参加する700人のパーティを実現できたと話す。

「政府や市とは、ほとんど関係を持ちません。もちろん、本部は代表して政府とも関係していますが、私たちの支部が何かしてもらうことはほとんどありませんし、私たちが市のためになにかするということもありません。呼ばればフォーラムに出席して、他の団体と意見交換をしますが、たいしてはそこまでです。なぜなら、私たちはそ

それぞれの活動にとっても忙しいですし、目の前にある仕事に集中したいので、できるだけあまり手を広げないようにしています。それでも、ショップがどんどん手狭になってきたので、現在、移転できるかどうかを検討しています。移転先は近くがいいですし、賃料があまり跳ね上がっても困りませんから、どんな可能性があるか探っているところです。そのような、移転にかかる費用については、一回だけ必要なお金なので、フレデリクスベア市の担当者と相談をして、このための助成金を獲得できれば実現できるのでは、と考えているところです。

「下請け化問題」に関しても、ハリングさんはきっぱりと「まったくない」と言う。市や政府はよくしてくれるといい、むしろ困っているのは、手伝いたくても手伝えない状況だという。フォーラムに参加したり、他団体との交流が自分たちの活動を豊かにすることは分かっているもの、その日に訪問しなければならない家族がいれば、そちらを優先する。フォーラムや市の催し物はどうしても後回しになるという。また、後継者問題についても、ハリングさんはさほど気にしていない。5人の理事のうち、一人がもうすぐやめるという時期に話を聞いたのだが、その代わりに理事会のメンバーになる「補欠」もまた、この半年ほど行動をとるにしており、その意味で引き継ぎもスムーズにいきそうだ。フレデリクスベア支部を立ち上げたメンバーはどのように集まったのかを尋ねると、ひとりひとりの名前を挙げながら説明してくれた。そして5人のうち実に4人までもがハリングさんの個人的なつながり、ノルディックウォーキングや社交ダンスのアソシエーション、前の職場、教え子、友人といったつながりから参加している。

明るく、包容力のある、とても70歳代には見えない活動的なハリングさんは、会の活動をた

いへん楽しく意義深いものだとみなしている。と同時に、他にも所属するノルディックウォーキングや社交ダンスの集まりも積極的に楽しんでいる。「今日は、この団体の代表だということを見せなくてはと思って、バッジを付けてきましたよ」という。知り合いの輪を広げ、つなぎ合わせながら、ハリングさんは、孤立する母親たちと顔の見える関係を気づきながら、フレデリクスベアの地元で根付いた活動を実現させている。

(3) 「梟の会」ピーター・ウィレンズさん

「梟の会」のフレデリクスベア支部を立ち上げた、ウィレンズさんは、46歳、銀行の不動産部門 IT サポーターとして勤務している。市会議員の妻、20歳になる息子、15歳の娘の4人家族であり、「梟の会」は週に1回、参加している。フレデリクスベア市の「黄色い家」の中に、特別にこの団体だけに与えられた事務室があり、そこでインタビューに答えてくれた。

ウィレンズさんが2009年1月に立ち上げたこの会は、北欧諸国にある大きな団体の地元支部である。1990年にノルウェーで発足し、その後、スウェーデンやデンマークの都市に広まった。デンマークでは1998年に最初の支部が設立され、現在ではグリーンランドやフェロー諸島を含め253の支部がある。ウィレンズさんのフレデリクスベア支部もそのひとつである。

「梟の会」の主な活動は、週末の夜、街を見回ることである。黄色いジャケットを着て、3人がチームとなる。男性のみ3人のチームは絶対に組まず、必ず女性が一人以上入るように気をつけている。男性3人では威圧感が出てしまい、若者たちが近寄ってこないからだという。黄色いジャケットのポケットには、コミュニケーションツールが入っている。飴である。街で週末の夜を過ごす若者たちは、黄色いジャ

福祉国家の中のボランティア

ケットきたこのチームが飴を持っていることをよく知っていて、彼らのほうから話しかけてくる。そして、とりとめのないおしゃべりをして、また別れる。支部によっては、飴に加えてコンドームを配布しているところもある。しかしフレデリクスベア支部では、一緒にボランティアとして働く移民背景をもつデンマーク人への配慮から、コンドームの配布は控えているという。黄色いジャケットをきたチームが、若者の喧嘩の仲裁をしたり、介入したりすることはない。警察との違いについて、ウィレンズさんは次のように話す。

警察とは違って、わたしたちはどのような場面に出くわしたとしても介入しません。ただ見守るだけです。ドラッグをしていようが、明らかに幼い子どもたちの飲酒の場面を見ようが、その場で何かをすることはしません。若者に話しかけることもしません。ただ、黄色いジャケットを着て、週末、若者で賑わう地点を見回るのです。もめ事があると、警察のほうに知らせてくれて、そちらのほうに近づくな、と警告してくれます。私たちの活動の中心は、私たちはいつでも若者たちを見ている、ということを示すことなのです。

もちろん、警察とは連携しており、危機的な状態を目撃した場合はすぐに連絡を取り、若者の安全を確保することを優先しているし、ボラ

ンティアとして活動する人たちも、救急法についての講習や、一定の知識を得るための講義に参加することが義務づけられている。しかし、若者との信頼関係をはぐくむために、お説教してまわったり、何かの価値を押しつけたりすることはない。ただ、話しかけられれば話に応じ、飴が必要だと言われれば、それを渡すだけだという。「私たちがコンドームを持っていないとわかると、大げさに嘆いてみせるローティーン

の若者もいます」。フレデリクスベア支部の場合、地下鉄運営会社と提携しており、黄色いジャケットを着て見回りをする場合は無料で乗車できる。ウィレンズさんたちは、22時から24時の間に、メトロで終点まで行き、1、2時間かけて歩いて戻ってくるコースを担当している。クラブがないこの地区の若者は、24時を過ぎるとほとんどコペンハーゲン市街に出かけていく。地下鉄が24時間運行しているため、真夜中でも行き来が容易であり、そのため、クリスマスや夏至の日など、時々コペンハーゲン市にある他の5つの支部と共同で、見回りをすることもある。

ウィレンズさんがこの活動に関わった理由は次のとおりである。

なぜこの活動をしようかと思いついたかという、二つの理由がありました。一つは、子育てに



パンフレットや旗



電車のラッピング広告

手はかからなくなったのですが、二人の子が難しい年頃になっていました。思春期の子どもたちに、「責任のある親」として社会のために活動する姿を見せたかった、というのがほんとうの理由です。スポーツクラブや学校のPTAといった身近な活動から一歩離れて、社会のために何かしたいと思っていました。もう一つは、妻が市議会議員だったからです。妻のマリーナは2009年に一年間、補欠当選をして、市議会議員を務めました。2010年は残念ながら14議席を争う選挙で16番目だったため落選してしまっただけですが、妻が議員のときに仲間呼びかけこの支部を立ち上げました。

当初は35人のボランティアスタッフがいたが、現在は25人。そのうち5名が、理事として、6週間に一回、会合を持ち、会計や事務を担当している。年に一回、会計報告をする全体会が開かれる。設立当時は、フレデリクスベア市の助成金を得て、ユニフォームやグッズの作成を行った。現在では、本部からの活動資金と寄付によって財政的には余裕があり、見回り以外の活動をしようと、計画を立てている。ウィレンズさんはボランティア活動について次のようにとらえている。

「下請け化」という考え方は少し違うのではないのでしょうか。ボランティア活動は自由だと思います。ボランティアのほうが、継続性が高いと思います。選挙で選ばれているわけでもなく、法律で決められているわけでもない。そのほうが、長く続けられるのです。デンマークはアソシエーションの国で、誰もがどこかのアソシエーションに属しています。私も地方義勇軍の他にも、射撃の会にも入っています。妻はいつもボランティアについて次のように話しています。ボランティアは「糊」のようなものだ、と。社会をくっつける「糊」なのです。

ウィレンズさん自身は、コペンハーゲン市で

育ち、結婚してから22年間はほとんどフレデリクスベア市に居住している。高校生のときに政治に目覚め、保守党青年部で現在の妻マリーナさんに出会った。地方義勇軍の志願兵を務めており、軍事訓練を受けている。そこで習得した救急や消防の知識は、現在のボランティア活動にも役立っている。地方義勇兵としては軍曹の位を務めており、100名の部下がいる身分でもある。ウィレンズさんの語りには、「責任」という言葉が繰り返して登場する。社会のために何かしたいという思いも、責任の一部だと思うからだという。

子どもは二人とも、学校評議会の生徒代表を務めたことがありました。とても誇りに思っています。そのような、責任を果たすことのできる人に成長していることを、親としてとてもうれしいです。そして私自身も、責任のある親であることを、自分にも、子どもにも、妻にも示さなければいけないと思ったのです。そして何より若者たちの成長を見守りたいと思っています。

「梟の会」は全国に2万人の会員を有する大きな団体であり、電車のラッピング広告を出して広報を展開できるくらい、力をもつ団体である。ただし、ボランティアのリクルートに関しては、地元のショッピングセンターでパンフレットを配るなど、地道な活動を展開している。とはいえ、フレデリクス支部の場合、ボランティアスタッフは十分に足りている。リクルート活動を途切れず展開するのは、このような活動を多くの親世代に知ってもらいたいからだという。生活を支える銀行での仕事よりも、ボランティア活動を率い、地方義勇軍としての責任を負うことを、ウィレンズさんは生活の中心においている。

(4) 「K10」 Dさん、Hさん

K10はアソシエーションではない。匿名で活動することができるウェブ上の集まりである。今回、場所も名前も電話番号も公表していない、この「アソシエーション未満」の団体にコンタクトをとれたのは、新聞社を通してだった。コペンハーゲン近郊の団地に暮らし、K10というウェブサイトのウェブマスターを務めるDさんと、そのパートナーHさんを訪れた。

Dさんは40歳代後半から50歳代前半の大柄な男性。疾病のため就職することが難しく、障害者年金を受給している人たちのひとりである。パートナーのHさんも同じく病を抱え、長時間、集中して仕事をこなすことができない。Dさんは上下の歯をすべて失っており、話をするのも難しい状況だったにもかかわらず、外国から尋ねてきた研究者であるということで、特別に時間を割いてくれた。

K10は2005年10月6日から始まった設立5年のインターネット上のサイトである。毎日、6,000人ほどのアクセスがあり、5年間で総計200万回以上のページビューがあった。テーマは、「フレックス・ジョブ (Flexjob)」と疾病失業給付 (Førtidspension) の受給に関する問題について。未経験の人にとっても、また給付を受けている人たちにとっても、自分たちの経験や知識に基づく助言や発言を自由に書き込める場所となっている。デンマークの「フレックス・ジョブ」とは、疾病等の理由により就労能力が低下していると自治体によって判定された人に認められる柔軟な働き方を指す (鈴木 2010: 119-152)。ただし、2000年以降、緊縮財政を進めてきた政府や自治体にとって、「フレックス」適格者かどうかを認定する基準が以前よりずっと厳しくなっており、当然、認められるはずの人に対しては労働市場であらたな職を得るような圧力がかかる事態が何年も続

いている。K10では、「フレックス」と認められず困難な状況にある人たちや、不本意にも生活保護受給者となることで増幅する問題など、「社会的弱者」が集まる自助活動が展開されている。このサイトを立ち上げた理由を、Dさんは次のように話す。

自分が、あるとき病気になって解雇され、フレックス・ジョブと直面したりしたときに、助けももらえる場所がなかったからです。自治体からは何の援助も得られませんでした。デンマークでは、パートナーが生活保護を受けていると、もうひとりが生活保護を受ける時に減額される制度があります。上限があるのです。私は疾病失業給付を受けていましたがその期限が切れると、自動的に生活保護を受け取ることになりました。けれどもぐっと減額されるわけです。私たちが厳しいと感じるのは、普通の生活保護受給者は失業者なので、求職すれば就業できるのに対し、病気のため「フレックス」として就業している人は、いったん職を離れると、あとは減額された生活保護しかない、という点です。

「フレックス・ジョブ」の資格ありと認定された人は、症状に合わせて柔軟に働ける職を得る権利を得る。けれども、そのような職場は当然のことながらめったにない。「フレックス」として認定された人たちの場合、定期的に通勤したり、毎日同じ時間に同じ内容の業務をこなすということが難しい場合が多いからだ。「フレックス」に認定されほっとするまもなく、その後には待っている現実が、実は期限付きの給付制度と自動的に「減額」される生活保護受給だということを知る。Dさんはそのような現実を、自分が経験するまで、誰にも助言してもらえなかったという。Dさんが匿名での活動する理由は、ひとつには、名前や電話番号を公表すれば、昼夜を問わずコンタクトを求める問い合わせがやってきて、対応しきれないからであ

る。Dさん自身も「フレックス」であり、現在、仲間3人と行っているサイトの管理だけで、起きている時間のほとんどが費やされるという。もうひとつは、実害に及ぶからだという。ジョブコンサルタントとケースワーカーの例をDさんは説明してくれた。

私たちは、実際にはジョブコンサルタントなどがデンマークの法制度を遵守していないと気づいたのです。でも法律に通じていないとどうしたらいいかわからないでしょう。…ジョブコンサルタントとして働いていた人が（ここで）助言をして、相談者を助けてくれていました。しかしそのために、この人は解雇されました。今はやはりケースワーカーの人が（助言者として）関わってくれていますが、自分の所属については公表していません。…職を失うかもしれないからです。…私たちの暮らすK市もまた、K10を監視しています。彼らはこのサイトがこの地区にあることを知っており、私たちの動きを見守っています。なので、（市と）連携などというものはありません。

Dさんの言い分はこうだ。この10年間、経済的不況を理由に福祉予算の削減や人員削減が行われ、そのために給付資格の認定基準の厳格化が進んでいる。K市のような郊外の町には、住居費の安さから、比較的貧しい人たちが集まる傾向があり、また、その分、福祉予算が膨張する。そのためK市は、K10が「コツ」や「技術」を吹聴し「福祉依存者」を増加させているのではないか、同じ内容の書類を持った人が押し寄せるのではないかと恐れているのだという。ケースワーカーやソーシャルワーカーは「自治体の財政状況に応じて案件を処理し、上から言われたことだけをする」のだから、助言など期待できない。そしてこのサイトに集まってきた人たちは、自主的に経験を交換する。あるいは、彼らの活動に共感する専門家が、匿名で、法律や申請書の書き方を助言するという。

K10の大きな特徴は、「アソシエーション」の形態をとっていない点にある。サーバの維持費として支払う月々600クローネ（9,000円）を、彼らはわずかな給付金から個人の負担で支払っている。なぜK10がアソシエーションとならないのか、その理由について、Dさんは二つの点を強調する。第一に、K10で扱う情報は無料であるべきだという点、そして、第二に、匿名性が重要だという点である。

私は労働市場にいたことがありますが、そこでは労働組合を使うことができます。組合費を払っていれば、運がよければソーシャルワーカーに助言してもらえます。組合に加入していなければ、自分たちでお金を払って、民間のソーシャルワーカーの助言を受けなければなりません。

Hさんが続ける。

もしもK10をアソシエーションにしたら、会費を払うよう会員に求めることになるでしょう。そうしたら、50%以上のユーザーがいなくなることでしょ。とにもかくにも、扱っているのは普通の情報なのです。人々が訊くのは、こうしてもう書類を出して4ヶ月がたつけれど、リアクションがない…そんなことです。…こんなのは、お金がかかるべきことじゃありません。…普通の情報テキストなのです。

サーバの維持費を寄付しよう、助成金をとってきてあげようという申し出も数多く受けるというが、DさんとHさんはそれを断り続けている。なぜなら、生活保護の給付を受けている二人が、たとえサイト維持のためだとしてもその経費を誰かから受け取ると、「収入」だとみなされ、少ない給付額がさらに減額される。助成金を申請すると、理事会メンバーを公表することが求められ、匿名で活動することができなくなり、それは匿名で支援してくれている専門家の

人たちを巻き込むことにもなる。今のところ最善の選択が、自分たちの資金で続けていくことなのだという。とはいえ、アクセスが増加し、プレゼンスが増し、グーグル検索でトップに上がるようになって以降、DさんとHさんの活動は世間によく知られるようになった。同じ立場の仲間たち数人と、国会での聴取に招致されたこともあった。しかしその場合も、アソシエーションの形態をとっていなかったため、「非公式」の意見聴取になったという。Hさんは言う。

国会での聴取に招致されたこともありました。実際には、私たちは正式に聴取される要件を満たしていないのですが、これはそのためには正式にアソシエーションの形をとる必要があったためです。これを話すともた元に戻ってしまいますが、要は（利用に）お金がかかるといったことから、組織化は行っていないわけです。私たちは、デンマークにお金のかからないところがあるというのがとても大切だと考えているのです。ほんとうに、実際、月に300クローネ（4,500円）しかないという人たちがいるのですから。だから、そういう人たちにとって無料であることが重要なのです。…これだけ大きくなり、たくさんの人がいるわけですから、アクションを起こそうという話ももちろん出ました。

とはいえ、実際に、政治的なアクションを起こすには至っていない。なぜなら、多くの人が病を抱え、外出がままならず、時間のコントロールも難しい状態におかれているからである。実際、このサイトが有益なのは、昼夜問わずアクセスできる体制だからだという。とはいえ、もちろん、コンピュータさえ持たず、ほんとうに孤立した人がいることを忘れてはいない。

20年前だったらできない活動でした。…社会のもっとも弱い人たちというのは、インターネットで出会って、何かをするということです。私たち

は、全国を駆け回って自分と同じ状況にある人を探して話すだけの資力も、健康状態もありません。ですが、実際には世の中には私たちよりさらに弱い状況にある大きなグループがあり、インターネットを使えない人たちもいるのです。インターネットを持つだけの経済的余裕がなかったり、技術的に使えなかったり、様々でしょうが…その人たちは完全に排除されてしまっているのです。…これはほんとうです。私たちだって、もしもインターネットがなかったら、完全に迷子になってしまうでしょう。

K10というサイトがあることで、そこに何かを書き込めば誰かが誠意をもって返答してくれることが知られるようになった。それは、書類の書き方やコツを伝授するという側面以上に、心の支えとなっているからである。当初、「荒れた」書き込みについては、ウェブマスターのDさんが整理をしていたが、最近では、ユーザー間のやりとりで、攻撃的な書き込みが抑制される雰囲気が出てきたという。サイトを離れた「オフ会」も地方ごとに開かれており、外に出ることのできるHさんが、そのような会合に出席している。政府やK市のような自治体との敵対関係が、彼らが思うほど深刻なものなのかは検証できていないものの、K10は資力や健康状態の問題を抱える「フレックス」にとって、ほぼ唯一の、交流の場となっている。豊かな福祉先進国といわれるデンマーク。当事者でありながら、もっと弱い立場の人々に思いを寄せ、二人は「アソシエーション未満」のこのサイトを、現在も無料で維持している。

(5) フレデリクスベア市役所イエッテ・ホフさん

フレデリクスベア市役所でボランティアコンサルタントとして働くイエッテ・ホフさん。2007年に市議会の決定で設置された期限付きのポジションで、「ボランティアフォーラム」や

「ボランティア賞」の運営、市内のボランティア活動の支援を行っている。「ボランティアフォーラム」の理事改選は4年に一回実施することとなっており、2010年5月に代表選が行われた。その際も、市内にアソシエーションとして登録されているすべての団体に声をかけ、立候補を募り、投票をして代表者10名を選出したという。また、同年11月には、市役所を挙げての「ボランティアデー」が予定されており、その企画も進行中だという。フレデリクスベア市のボランティア政策に関しては、次のように説明する。

市には「ボランティアセンター」がありません。以前はあったのですが、2008年に閉鎖しました。一般的な対応ではなく、団体ごとに個別の対応が必要だと判断からです。そして私のような専門職のポジションができ、「フォーラム」のようなネットワークを作ろうとしています。1999年社会サービス法の施行とともに、市としてはアソシエーションに対する資金を常に持つ、ということを決めました。住宅関連予算から住宅関連の活動をしている団体に助成する、というような、硬直化した方法を見直すためです。

フレデリクスベア市も「構造改革」が進み、たとえば、福祉部門、住宅部門、統合（移民関連）部門が統合された。そのため、従来の方法で予算を使うことができなくなり、領域をまたがったアソシエーションを支援するとの名目のもと、アソシエーションのための支援金として年間430万クロネ（約6,450万円）が与えられている。この支援金の配分が、ホフさんの主な仕事になっている。助成金の申請は2010年度の場合75件あり、継続支援を含めて80-85の団体に対する支援が行われている。ホフさんは申請書の書き方から、会計の方法、今後の活動方針など、全般にわたる個別指導を常に行っている。

「ボランティア賞」の仕組みについても、次のような説明があった。2007年から市議会の決定を受けて設置された賞で、団体と個人に賞金と賞状が贈られる。賞金は団体で15,000クロネ（約22万5千円）、個人で10,000クロネ（約15万円）である。自薦・他薦による候補者を受け付け、審査委員会が審査する。2010年は50通の推薦状が集まった。賞の目的は活動の努力を称えること。と同時に、シャンパンの振る舞われる華やかなパーティを開いて、団体同士の交流の場を持ってもらうこと。「ボランティアフォーラム」の予算は別に250,000クロネ（約37万5千円）があり、交通費や軽食の費用としている。

日本の事情を伝えながら、アソシエーションが、とりわけ福祉分野で活動する団体が行政の仕事の一端を担う「下請け化問題」について、フレデリクスベア市の実情を尋ねた。

ボランティアが安い労働力として利用されることがないように、市は厳密に区別をしています。そのため、アソシエーションが自分たちでアジェンダを決めていますし、市がやってほしいことを定めることはありません。社会サービス法第18条にあるとおりです。団体が自分たちで決めるのが重要です。市としても「利用された」とは思っほしくありません。活動が途絶えてしまいますから。団体側から市に対するアプローチはありますが、逆はありません。

ホフ氏もボランティアセクターの成長に応じて、誰がその活動を担うのかの役割分担が曖昧になってきていると指摘する。すべてが関連しているし、団体の規模の違いも、仕事（job）の差につながりかねない。しかしやはり、パーソナル・コンタクトを持てる点で、ボランティアスタッフの活動はどうしても必要なものだという。

子ども・若者分野で活動している団体の例で、とてもいい例がありました。施設に送るほうがいいと思われる子がいました。ボランティアスタッフがソーシャルワーカーに連絡をとって、引き継ぐと準備をしていました。けれども、何度か会ううちに、その子はボランティアスタッフとの信頼関係を築いていきました。施設にいかなくてもいいことになったのです。本人がそのように希望する場合は、ソーシャルワーカーはあえて施設に送るとする方法をとらない場合もあります。もちろん、緊急の場合は、行政が介入するのですが。

ホフさんはボランティアコンサルタントとして勤務する唯一のスタッフであるが、話を伺う限り、市内の数百にのぼるアソシエーションのほぼすべてを把握している。多数のメーリングリストにも参加していて、各団体の情報にも通じていた。ホフさんの仕事は、アソシエーションを支援することであって、その逆ではない。そのため彼女の仕事はある意味、必要とする支援を、限られた予算と時間の中で管理することであり、それ以上の介入は行っていない。アソシエーションの立ち上げに関する講座の開催も行わず、他機関でのプログラムを紹介するにとどまっている。スキルアップのためのコース等も、他団体の事例を示し、市の外で支援を得る方法を伝授している。「ボランティア賞」、「ボランティアフォーラム」、そして「ボランティアデー」のような、イベントを通した団体同士のネットワーク作りがホフさんの仕事にとって中心になっている。

4. おわりに

今回のインタビュー調査をとおして、福祉制度の発達したデンマーク社会で、ボランティアセクターがどのような役割を担っているのかについて、ボランティア活動を実際に行っている現場からの見解を知ることができた。「生活の

質」を向上させる、楽しみとしてのボランティア活動を行う新世代の若者から、無料の場を実現するために、あえて「アソシエーション未満」の状態を維持する当事者の団体まで、幅広い活動が展開され、共通点を見出すのは難しい。しかしいずれも、行政サービスと民間サービスの狭間にある領域で、目の前にいる高齢者、母親、若者、「フレックス」に対して関わりをもととする活動である。

2009年および2010年の調査をとおして、デンマークのボランタリーセクターの行動を規定するのが、1999年に施行された「社会サービス法第18条」⁽⁴⁾であること、そしてその法律とその精神を多くが理解し、行動に反映させていたことがわかった。今後も、この法制度が、ヨーロッパで顕著な「福祉国家の再編」問題とどのような関わりをもつのか、デンマークを事例に調査を続けたい。

【注】

- (1) やりがいの搾取とボランティアの関係は、日本語の議論では頻繁に言及される。ボランティアは政府による周到な動員の形式だとする「動員」論として、あるいは低賃金で劣悪な労働を他者のためという美名のもとにカモフラージュする「やりがいの搾取」論として否定的に語られることが少なくない(中野 2001; 仁平 2011)。しかしこのような「動員」や「搾取」が、ボランティア特有の問題であるとは限らない。不本意な条件の下に甘んじて「仕事」を引き受けなければならないのか、それともそのような状況が予想された場合に拒絶したり、条件を交渉した上で引き受けたりできるのかは、一般的な意味で、「労働者」としての法的権利が大きな意味をもつ。「動員」論や「やりがいの搾取」論を、いたずらにボランティア活動に限定して議論することで、「権利」をめぐるより大きな枠組みでの論点が見過ごされているのだとしたら、この点についてはさらなる考察が必要になるだろう。
- (2) 研究協力者としてロスキレ大学鈴木優美氏に

たいへんお世話になった。インタビュー・データのうち「K10」については、すべてデンマーク語で行われた会話を鈴木氏が特別に書き起こしたトランスクリプトを元に再現した。

- (3) 「社会的弱者を助けたいと考える若者が増えている」(『ポリティケン』2010年8月4日号)。
- (4) 社会サービス法18条は次のとおり。「市議会は、アソシエーションを支援するものとする。二、市議会は毎年、自主的なソーシャルワーク支援の資金を拠出する。三、各地方議会によって設立された協力の枠組みを設定する。四、社会担当大臣は、自主的なソーシャルワーク支援と地域開発に関する報告書のガイドラインを定める」(<https://www.retsinformation.dk/Forms/R0710.aspx?id=135328#K2>)。

【参考文献】

Thomas P. Boje, Torben Fridberg, Bjarne Ibsen,

(red.), 2006, *Den Frivillige Sektor i Danmark*, Koebenhavn: SFI.

Thomas P. Boje, 2008, *Den Danske Frivillige Nonprofit Sektor I Komparativt Perspektiv*, in *Det frivillige Danmark*, Odense: Syddansk Universitetsforlag, SS.179-201

Klaus Levinsen, Melene Thøgersen, Bjarne Ibsen, 2011, *Institutional Reform and voluntary Associations, The Voluntary Sector in Nordic Countries*, The Civil Society Forum: Bergen

中野敏男 2001『大塚久雄と丸山眞男』青土社
仁平典宏 2011『「ボランティア」の誕生と終焉』名古屋大学出版局

坂口緑 2011 デンマーク・ボランタリーセクターの現在——「共同責任」と「生活の質」明治学院大学社会付属研究所年報41号47-63頁

鈴木優美 2010『デンマークの光と影』リベルタ出版